



夏



秋



冬



🍃 佐竹先生へ贈る言葉

緩和医療科科长 井上 彰

2022年10月から宮城県立がんセンターに異動された佐竹宣明先生については、ご本人の手記も本冊子に掲載されていると思いますが、緩和医療科長として長年のお勤めに「ありがとう」の気持ちを述べさせていただきます。

佐竹先生は、東日本大震災の翌年（2012年）春に当院緩和医療科に着任され、以後10年半にわたり多くの患者さん・ご家族のために尽力して下さいました。私が2015年に前任の中保利通先生（現やまと在宅診療所名取）から当科を引き継いだ際、他のメンバーは佐竹先生と中島信久先生（現琉球大学病院）だけでした。私は、お二人より一回りも年下の男の子でしたので、正直、中島先生にはかなり気を使いましたが、包容力のある容姿と雰囲気をもとう佐竹先生にはリラックスして接することが出来ました。その後、若手の医員が増えていった際にも医局長として皆を上手くまとめて下さり多に助かりました（飲み会の最後は佐竹先生による「伊達の一本締め」でお開きとなるのが恒例でした）。

病院内のスタッフなら佐竹先生の特技をご存知の方も多いでしょうが、音楽にマルチの才能を発揮なさいます。ピアノにギター、ウクレレを弾きこなし、「佐竹宣明とゆかいな仲間たち」としてホスピタルモールで演奏することもあれば、緩和ケア病棟での七夕コンサートやクリスマスコンサートでも主役を張っておられました（写真）。特筆すべきは、緩和ケア病棟に入院中の患者さんが誕生日を迎えた際には、患者さんのリクエストに応えて「歌のプレゼント」を届けていたことです。



多くはご家族も伴って先生の素朴な弾き語りに耳を傾けられたり、他の医療スタッフや学生さんも交えて皆で歌ったりして、涙を流して喜ばれる方も少なくありませんでした。演奏後に撮って差し上げていた記念写真は、患者さんが亡き後もご家族にとって大切な思い出の品になっていることでしょう（コロナ禍でこのような活動が制限されているのも本当に残念なことです）。

宮城県立がんセンター緩和ケア内科には、佐竹先生の（音楽の）お弟子さんである武田郁央先生も先に赴任されており、同院でも優しさと音楽に満ち溢れた新たな「佐竹ワールド」を築いていただけたと思います。一方で、東北大学病院では音楽の担い手が減ってしまったのが痛手ですが、当面は当院にも月1、2回お越しいただけるそうなので、その際に当院の患者さん・ご家族とスタッフに「歌のプレゼント」をお裾分けいただき、さらには新時代の音楽療法を担う後進の育成にもご助力賜れますと幸いです。

佐竹先生の今後益々のご活躍とご健勝を心から祈りつつ、贈る言葉とさせていただきます。

PS. この文章の中に歌のタイトルはいくつ含まれているでしょう？

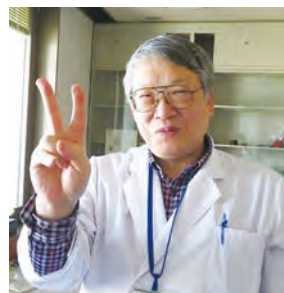
🍃 父と牛乳瓶

宮城県立がんセンター 緩和ケア内科医療部長 佐竹 宣明

牛乳は飲み物や料理の素材として今でも子供から大人まで親しまれています。現在は紙パックに入って売られているものがほとんどですが、昔は瓶入りが当たり前でした。牛乳の瓶は片手で持つにはちょうど良い大きさで、飲み口のところが丸く厚みがあり優しく唇に触れました。そんな牛乳瓶にまつわる、父との思い出があります。

私がまだ小学生のころ、今から何十年も前の昔の話です。父の実家に行くために駅のホームで列車を待っていました。少し時間があるので父は普通の牛乳を買い、自分はフルーツ牛乳を買ってもらい、店の前で二人で立って飲みました。当時駅の売店には牛乳がたくさん並んでいたものでした。私は甘く良い香りのフルーツ牛乳を最初はごくごく、残りが少なくなるとちびちびと飲みます。一方、父の牛乳の飲み方は一種独特なのです。まず、水平に小さな円を描くように瓶を数回振ってから一口飲み、また同じように振ってから飲むといった作法です。なぜ振りながら飲むのか不思議でした。ほかの人がそのような飲み方をするのを見たことがなかったからです。ただ、父の一風変わった牛乳の飲み方についての疑問は、動き出した列車の窓から流れる景色に心が奪われていき、いつのまにか頭から消えてしまいました。

それから時代は移り、牛乳瓶はストローのついた紙パックに変わりました。飲み物は多様化し、外で飲むものとしての牛乳の出番は少なくなりました。あの独特の飲みかたの理由を、今は亡き父に尋ねることはできません。でも、たまに瓶に入っている牛乳を見ると、父を思い出し懐かしい気持ちになります。ありふれた日常でも何か心に残ることがあれば、思い出になるのですね。映画のような感動的なシーンではなく、ほんのささいな出来事であっても。



🌿 緩和ケア病棟におけるお風呂の効能 (研究紹介)

緩和ケア看護学分野 教授 宮下 光令

この度は伝統ある「七つ森」に執筆機会をいただき、大変光栄に感じております。私は普段は東北大学医学部保健学科看護学専攻で看護学生の教育と研究に従事しております。せっかくの機会ですから、研究者らしく、最近本研究室の学生が行った研究についてご紹介させていただこうと思います。



東北大学病院にも緩和ケア病棟にも入浴施設（一般的なお風呂や機械浴）の設備があります。今回ご紹介する2つの研究は、本研究室の林ふりりさんがされた研究で、緩和ケア病棟における入浴が患者さんやご家族にどのような影響があるかを調べたものです。

1つ目の研究は患者さんを対象にお風呂にどのような効果があったかを検証した研究です。この研究では東北大学病院ではないですが、ある緩和ケア病棟に入院して初めて機械浴を利用した57人の患者を対象に、入浴日の朝10時と入浴30分後の症状の変化をみたものです。入浴の前後で最も緩和された症状は倦怠感(だるさ)で、不安、食欲不振、全体的な調子、痛み、気分の落ち込みなど多くの症状で統計学的に意味がある差をもって症状が緩和されました。そのほかにも眠気が改善したという人がいる反面、入浴後に心地よい眠気につつまれた患者さんも多くいらっしゃいました。

もう1つの研究はJ-HOPE4研究という東北大学病院も参加した多施設の遺族調査の一環で行われた遺族調査です。緩和ケア病棟で亡くなった遺族540人から回答を得ることができ、ご家族の入浴に対する感想として「家族として丁寧に扱われたように感じ嬉しかった(93%)」「湯船につかった後、患者の表情がやわらいだ(89%)」「患者は入浴を楽しんでいた(87%)」など、ほとんどの方から肯定的な感想が得られました。

緩和ケア病棟では亡くなる直前までご本人やご家族が望めば入浴されることが少なくないと思います。私も緩和ケア病棟で研修していた時に午前中に入浴した患者さんが午後亡くなられたことがありましたが、ご家族は「お風呂が好きできれい好きな人だったので、最後にお風呂に入れてよかった」とおっしゃっていたことが記憶に残っています。私は年に1～2回、看護学生の緩和ケア病棟実習を引率し、病棟の説明をすることがありますが、学生にこのようなことを伝えると、みんな驚き、そして素晴らしいことだと感想を述べます。寝たきりの人も多く、入浴は看護スタッフにとっても時には汗だくになって行う大変なケアですが、それがいかに患者さん、ご家族に感謝されているかを形にすることができてよかったと思っています。

Hayashi E, J Hosp Palliat Nurs, 2022

🍃 医学生さんからの質問

臨床宗教師 金田 諦晃

病棟に研修に来られる学生さんへ緩和ケアについてのお話をする時、人間が健やかに生きる為には、身体の苦しみを和らげることは勿論のこと、心の苦しみにも耳を傾けることが大切であることをお伝えしています。いつも最後に質問を頂くのですが、ある学生さんから、「心の苦しみはどのように予防すればよいのか」という質問がありました。医学生さんらしい素朴な質問だなと面白く思うと同時に、答えに詰まりましたが、その時は直感で「日頃から自分を大事にし、そして自分と同じように周りの人を大事にすることではないか」とお伝えしました。この直感の背後には、私自身の人間として、また僧侶としての経験、そしてなにより縁あってお会いした患者さんやご家族からの学びが根底にあって、単なる思いつきではないとも思いました。お伝えしたことは、私自身が生涯を通じて確かめていかなければなりません。

医学は疾病の治療や「予防」に多大なる貢献をしてきましたが、人間が老いや病、そして死に直面する中での心の苦しみは、数回のワクチン接種や特効薬の使用で対処できるものではなく、何を大事に生きるかという私たちひとりひとりの生き方や価値観に関わる問題です。そしてそれは長い歴史の中で哲学や宗教が向き合ってきたテーマでもあります。

自分なら学生さんの質問にどのようにお答えになりますでしょうか。試験問題のように正解は一つではなく、また移ろいゆくものかもしれませんが、その時に出した答えは、自分自身が人生において大事にしたいと思うこと、あるいは大事にしてきたことの一つかもしれません。



緩和医療科 医師 土屋 典子

はじめまして、土屋典子と申します。12月より緩和医療科で勤務しております。

医師を志した時から緩和医療を専門にしたいと思っておりました。

私の祖母は、私が学生の頃に癌を患いました。当時は、本人に真実を告げないことがあり、祖母本人も病名が伝えられませんでした。しかし自分の病状に気づいており、家に帰りたいたいといった姿が強く印象に残っております。

それをきっかけに、患者さんご自身の希望に添った生活のお手伝いをしたい、そして心身ともに穏やかな日々を過ごしていただけるためのケアを提供したいと考えるようになりました。その思いは医師として働き始めてからより一層強くなっております。

まだまだ勉強中の身ですが、家族や社会背景を考慮した医療を大切にしております。病があっても、その方らしく、穏やかな時間を過ごせるように努めてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

緩和医療科 医師 飯井 友見

4月から緩和医療科でお世話になっております。長年、手術麻酔などの急性期医療に携わっておりましたが、昨年度より宮城県立がんセンターで緩和医療に携わり、痛みなどの体の苦しみを抱えておられる方は、精神的な痛みなど他にも苦しみを抱えておられることも多く、十人十色の人生が背景にあり知れば知るほど緩和医療は難しい領域だと痛感しています。

その方の人生の段階に応じて異なった痛みがあり、体の痛みを和らげることはもちろん、少しでも困りごとを和らげられるような関わりが出来たらと思っています。

ご家族さまの代わりは到底できませんが、コロナ禍でご家族との面会を制限されている今こそ、少しでも患者さま、ご家族さまに寄り添える医師でありたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



4月から緩和ケア病棟で勤務しています。

出身は和歌山県で、呼吸器内科として大阪で勤務しておりました。

呼吸器内科疾患は、肺がん、慢性閉塞性肺疾患、気管支喘息、世間をにぎわせているCOVID-19など多岐にわたります。そんななかで「やっぱり肺が悪いと苦しんで亡くなるイメージ」という言葉をよく耳にしました。現に、「息苦しい」といった症状で来院されることが多く、治療薬だけでは症状を抑えられないこともありました。経験を積み重ねるほどに、疾患の治療薬以外で症状を和らげること、「緩和ケア」の必要性を実感しておりました。

そんななかで今回縁あって当院でお世話になることになりました。

考え方や言葉の壁、薬剤の使用の「ええ、あんばい」がつかめず、戸惑うことも多いです。ただ、諸先生方や看護師さん、患者様から緩和ケアのことはもちろん、「仙台の楽しみ方」を学び、充実した毎日を過ごしています。たくさん患者様、そしてご家族様とお話ししながら、これからも学ばせていただきたいと思っています。よろしく願い申し上げます。



緩和医療科 医師 高橋 浩彦

本年4月から、緩和医療科でお世話になっております高橋浩彦と申します。大学卒業後は初期研修を東北大学病院で研修をさせていただきました。その際に緩和医療科でも研修を行わせていただき、そこで緩和医療というものにとっても興味を持ちました。初期研修やその後の内科専攻医研修も含めて、癌患者さんと接する機会がとても多く、その時は患者さんとの関係性をしっかり築けていたと思っておりましたが、今改めて振り返ってみると、本当に患者さんの抱えている苦痛、悩みに対して向き合えていたでしょうか？話して下さっていたでしょうか？と考える事があります。そう考えた時に、緩和医療の知識・技術だけでなく、癌患者さんやそのご家族との関係性の築き方を再度見直したり、学びたくこの世界に飛び込んでみようと思いました。

コロナ禍で日々、大変な事が多いですが、それでも真摯に患者さんと接し、研鑽していきたく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

緩和医療科 医師 伊藤 圭一郎

はじめまして、伊藤圭一郎と申します。2022年4月から東北大学大学院博士課程に入学して、緩和医療科に配属になりました。

医師になってからは北海道で総合診療・家庭医療の研修を中心に行いました。緩和ケアについてより深く勉強したいとおもい、縁あって当院で勤務させていただいております。まだまだ未熟で至らない点もたくさんありますが、これまで学んできたことを活かし、真摯に対応できるように精進したいと思っております。



緩和医療科 医師 村野 賢一郎

初めまして、緩和医療科に6月から配属されている村野と申します。東北地方もだいぶ気温が上がってきましたが、皆さんいかがお過ごしでしょうか？

簡単に自己紹介致します。医学部卒業当初、何を専門とすべきか迷っていた時期に、20歳そこそこの女性のがん終末期医療に関わりました。そこで必要とされていたのは、ご本人の苦痛緩和のための医療だけではなく、崩壊しかけている家族も含めた『ケア』でした。当時の私は何も力になれませんでした。いつか役に立てたらと思ってこの道に進んでいます。

当初麻酔科医師としてトレーニングを受けたのち、こちらに来る以前は在宅医療の現場で緩和ケアを含む仕事をしておりました。東北大学緩和医療科には様々なバックグラウンドを持った多様な医師が在籍していますが、そのような仲間とのディスカッションを通して一人ひとりの患者さんの治療・ケアの質向上のために役立てたら嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします。

緩和医療科 医師 吉田 清香

6月から入職しました吉田清香（よしださやか）と申します。

山形大学を卒業後、主に福島で乳腺外科医として仕事をしていました。8年前に仙台に移住し、子育てをしながら乳腺外科外来と乳癌検診業務などをしておりました。

子供が徐々に手を離れていくなかで、これから先自分がどのように仕事をしていきたいかを考えるようになり、もともとは在宅緩和医療をしたくて医師を目指したことを思い出しました。乳腺外科医として第一線を離れたこの機会に一度初心に戻ってみようという気持ちと、それを後押ししてくれたご縁があり、来年の1月までこちらで勉強させていただくことになりました。

ここでは、医師、スタッフや患者さんから人として学ぶことがとても多く、この学びの機会を大変有り難く感じております。どうぞよろしくお願いいたします。



緩和に対しての思い

緩和ケアセンター GRM 看護師長 三浦 洋子

緩和ケア病棟を2年経験させて頂き、その後、緩和ケアセンター GRM として1年半が経ちました。

2019年の緩和ケア病棟はまだコロナ禍前で、大切な御家族や友人である患者さんと、ゆっくり時間を過ごす事ができました。太平洋を望むホールでは、勝山館のプランナーさんにサポートしてもらい、動くことが辛いお母さんのために結婚式が行われました。ご家族の素敵な笑顔とウエディング姿の花嫁さんを、私たちスタッフも思いがけず見ることができました。ウエディングマーチの演奏と歌をプレゼントさせて頂き、幸せのお裾分けをもらいました。また、季節の飾りをされたラウンジでは、ご家族とブレスレット作り、クリスマス会ではボランティアでフラダンスを披露したいと申し入れがあり、「祈りを込めたフラダンス」に患者さん御家族そして職員一同感動をしました。翌年3月から面会制限が始まり、ご家族との大切な時間を、限られた人数で限られた時間の面会となってしまいました。患者さんの安全を守るために必要なことなのですが、患者さんご家族そして私たちスタッフもとても辛い思いでいっぱいでした。

緩和ケア外来では、患者さんの療養の場を選択する入棟面談が行われています。面談をしていると、緩和という言葉に抵抗があったり、過剰に期待をもって来られる方など様々です。緩和ケアについてみんなの理解が深まり、外来・病棟・地域と切れ目のない緩和ケアを提供できる体制になるといいと思っています。少しでも不安の軽減が出来るように、患者さんにご家族の思いに耳を傾けて、そして今のコロナ禍の時代だからこそ、緩和ケアをどこでどのように受けていくのがいいのか考え、ご家族と一緒に過ごせるように在宅調整をしたり、多職種で支えられるようにしていきたいです。



診療統計

対象期間 2017年(2017年1月から12月)
2018年(2018年1月から12月)
2019年(2019年1月から12月)
2020年(2020年1月から12月)
2021年(2021年1月から12月)

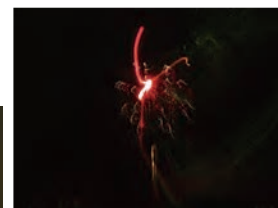
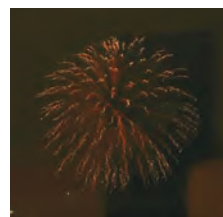
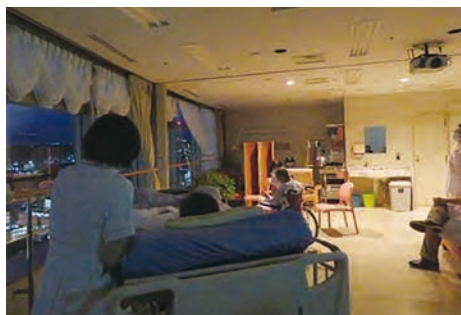
	入院数	在院日数	死亡退院数	稼働率	待機期間数
2017年	262人	23.7日	196人	75.6%	
2018年	280人	21.7日	211人	74.9%	8.2日
2019年	280人	19.4日	227人	66.2%	7日
2020年	213人	28.8日	172人	60.2%	6日
2021年	156人	18.3日	124人	34.2%	6日

評価

西17階病棟 斎藤 明美

COVID-19感染拡大により、病棟閉鎖や病棟縮小稼働、面会制限などにより、入院患者数の減少が考えられます。

2年振りの花火大会



「緩和ケアと私」

緩和ケアセンター 杉山 育子

私はがん看護専門看護師として病院内で横断的に働いています。「七つ森」の原稿依頼を受け、これまでの十数年の看護師人生(大袈裟ですが)を振り返ってみました。学生時代「緩和ケア」を学んだ記憶は殆どありません。実習先の病院に緩和ケア病棟は無く、緩和ケアチームもありませんでした。その後、他県の大学病院の脳神経外科病棟に勤務しました。そこでも「緩和ケア」を意識して働いていたとは言えませんでした。患者さんと家族にとって最善はなにかを考えながら看護を实践する熱心な先輩方に出会えたことで私の「緩和ケア」マインドがつくられたと思います。そこで出会った脳腫瘍の患者さんや家族との関わりや志のある多くの医療者と協働できたことが看護師として更に専門性を高めるきっかけとなりました。あらためて、出会う人に恵まれ今の自分があると感じています。長い人生の一時、けれども大事な時に出会う医療者として私も熱く(時には少し俯瞰しながら)成長し続けたいと思います。



西 17 階病棟 副看護師長 小嶋 倫世

私は今年4月に集中治療部から異動してきました。コロナ禍で厳しい面会制限の中、過酷な闘病生活を送り、治療の甲斐なく一人で息を引き取る方々を看る中で、最期のひとときを大切な人とどのように過ごすか、そこに寄り添う看護がしたいという思いが強くなり希望しました。実際に働き、自分の未熟さを痛感する毎日です。上辺だけのやり取りになってはいないか、患者さんやご家族が本当に求めていること、自分にできることはなにか、医療者の一方的な介入になってはいないか等、日々自問自答しています。

緩和ケア病棟は静かな療養環境ですが、活気があり笑顔が絶えない素敵な病棟です。景色も良く、ボランティアさんの心のこもった季節を感じる装飾品に囲まれ、患者さん・ご家族とのやりとりに癒されながら働いています。大学病院に緩和ケア病棟が存在する意味を考えつつ、スタッフの皆様にご指導頂きながら歩んでいきたいと思ひます。

西 17 階病棟 副看護師長 菅野 佳代子

4月より緩和ケア病棟に配属になりました。久しぶりの病棟勤務に戸惑う事も多くありますが、諸先輩方、患者さん、そしてご家族に支えて頂き毎日を過ごしております。緩和ケア病棟には病と闘い、辛い治療に耐えてこられた患者さんが入棟してきます。私は患者さんからのお話や記録でしかその経過を知ることはできませんが、それでも病と向き合い、闘い、多くの苦悩を乗り越えてこられたことが想像できます。患者さんによって緩和ケア病棟に望むことは異なりますが、一人一人の患者さんの希望に添ったケアを提供すること、そして少しでも安楽に、良い時間が過ごせるようなお手伝いができればと思っております。今は自分に出来ることは何か自問自答の毎日ですが、毎日の一つ一つのケアを丁寧に、そして誠実に、今の自分に出来ることを精一杯取り組んでいきたいと思っております。まだまだ未熟者ですがどうぞよろしくお願い致します。



西 17 階病棟 看護師 日下 千恵

緩和医療など自分には縁遠いものと思って過ごしていたのが、3年前に母親の突然のがん闘病で身を持って体験することになりました。思いも寄らなかった出来事に私自身の気持ちが追いつかず、十分に寄り添う事ができなかったことがいつまでも心残りとなっていました。このタイミングで緩和病棟に異動となったのは、なにか母親が導いてくれたような思いがし、気持ち新たに臨んでおります。

現場ではこの5ヶ月の間にも、様々な出会いと別れを経験させて頂いています。まだまだ未熟で、諸先輩やスタッフの方々に助けられながらの日々ですが、自分自身の体験を共有し患者様やご家族の方々に少しでもお役に立てる様、緩和ケア病棟看護師として精進してまいります。

西 17 階病棟 看護師 森谷 成累美

皆様初めまして、今年の4月より緩和ケア病棟へ配属となりました。以前までは、脳外科・泌尿器科・総合外科の混合病棟で4年間働いていました。この4年間の働いている内に、何度も治療で入退院を繰り返している患者さん、これ以上の治療が出来ず肩を落とされる患者さんなど様々な患者さんに出会っていく中で、緩和ケアを学びたいという思いが芽生え、今回思い切って希望を出させて頂きました。今年で看護師として働き始めて5年目の私にとって、初めての部署異動であり、まだ分からないことばかりで先生方、看護師の先輩方にご迷惑をおかけしながら、沢山のことを教えて頂いております。希望していたこの緩和ケア病棟で働けることに感謝しながら、患者さんとそのご家族が、この緩和ケア病棟で心穏やかな時間を過ごすことが出来るよう精一杯頑張りますのでどうぞよろしくお願いたします。



西 17 階病棟 看護師 吉川 美穂

今年度 4 月から緩和ケア病棟に異動となりました。それまではしばらく外来で勤務していたので、久しぶりの病棟業務に慣れないことばかりですが、経験豊富なスタッフの皆様からご指導頂き、日々のケアにあたっています。外来では、緩和ケア病棟に入棟する前の患者様とばかり接していました。今後は入棟してからの限られた時間を、患者様が少しでも苦痛を和らげながら穏やかに生活できるよう、微力ながらつとめていきたいと思っています。

昨年に引き続きコロナによる感染症の対策のため厳しい制限がかかるなかで、一刻も早くこの感染症が終息することを祈りつつ、患者様やご家族様が安心して過ごすことができるよう看護にあたっていきたいと思っています。

西 17 階病棟 看護師 佐藤 あゆみ

今年の 5 月から緩和ケアセンターで勤務させて頂いております。配属当初は一般病棟との違いに戸惑いもありましたが、日々患者様やご家族と関わらせて頂く中で少しずつ緊張も解れていき、やり甲斐も感じられるようになりました。先輩スタッフの方にも看護技術をはじめ、患者様のこと、全体像の捉え方など沢山のことを教えて頂きました。看護師として、そして人としてもまだまだ未熟ではありますが、その分学びも多く、とても充実した毎日を過ごすことができていると感じます。多くの患者様との出会いがあり、同時に沢山の別れがありました。簡単なことではありませんが毎日の勤務の中で後悔の残らない関わりを心掛けながら患者様と関わらせて頂くようにしています。皆様の大切な時間を共有させて頂いていることに感謝し自分にできることは何か考え、日々精一杯尽くしていきたいと考えております。



退院調整看護師として、緩和医療科を担当させていただいております。限りある大事な時間を、住み慣れたご自宅で大切な方々と過ごしたいと思われる方はたくさんいらっしゃいます。そんな患者さんや家族の思いを、地域で支えてくださる訪問診療や訪問看護、ケアマネジャー等にお繋ぎするのが私の役目です。自宅に帰るにあたりこんなところが不安だ、こんな時はどうしたら良いのか、患者さんや家族の声を聞きながら、必要な在宅サービスを利用できるようサポートさせていただいております。最初は不安そうな表情の患者さんも、自宅へ帰れる日が近づくと、だんだん穏やかな表情になられていくのを見られることが私の励みになっています。これからも病棟スタッフの皆さんと協力しながら、患者さんや家族の思いを大切にしてお支援させていただければと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

看護助手 田村 美樹

東北大学病院で働く前は、子育てと介護を同時に担っていました。義母の葬送、子供の小学校入学を機に社会復帰を考え、2020年8月から当院の西10階でパートタイムの看護助手をしていましたが、2022年4月に緩和ケア病棟に異動となりました。

緩和ケア病棟に来て、義母が緩和ケア利用を考えていたことを思い出します。利用に当たり、私一人で決めることは出来ず、家族、親戚、病院で色々なことがある中で、利用できるように進めていきましたが、最終的には一般病棟で看取りました。

緩和ケア病棟は、他の病棟とは違う癒される雰囲気のある病棟だと思います。まだまだ戸惑うことばかりですが、経験豊かなスタッフの皆さんと働きながら沢山のことを学んでいきたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。



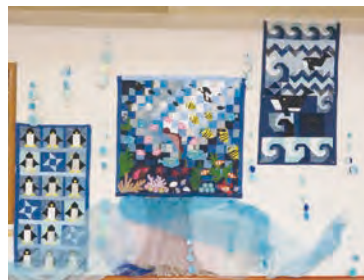
ボランティアコーディネーター 大山 恵子

ボランティアコーディネーターとして勤務し、5年が経ちました。その間コロナウィルス感染症の影響でボランティア活動が休止し、現在もその状況が続いています。病棟内にボランティアさんの姿はありませんが、活動は在宅制作という形で地道に続いていました。ラウンジに飾る季節ごとの飾り物や、患者さんへのバースデイカードなど、ボランティアさんが自宅で制作し病院まで持ってきてくださっています。9月に飾った海の大きな壁飾りは、以前患者さんが「海が見たいなあ」と話されていたことが心に残り、何とか海を感じるような作品が作れないかと試行錯誤して制作したものだそうです。その作品には細かいところまでいろんな工夫が施されていて、患者さんを想う気持ちが手の込んだ作品から伝わってきます。ボランティア活動の根底にはいつも患者さん、ご家族を想う気持ちがあります。この緩和ケア病棟にボランティアさんの笑顔が戻る日が来ることを切に願います。5年間、大変お世話になり心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

ボランティアコーディネーター 後藤 えり子

2021年4月よりボランティアコーディネーターとして、ボランティア室に配属となりました後藤えり子と申します。緩和ケア病棟に通うようになって約1年になりました。花についての知識も技術もない私ですが、病棟ラウンジの花の水替えや壁面の季節の装飾の作業をとおして、今まで以上に他の人の作品に関心を持つようになりました。特に、他の人が生けた花を同じに生け直すことで、その人の花に対する意図を知ることになるという発見がありました。それでも、正解があるわけではないので苦戦している私に、ある方が「花が自ら見せたいようにポーズを取ってくれるのよ」と声をかけてくれ、私は少しほっとしました。

新型コロナ前は、ラウンジで茶話会があったり、コンサートが開催されたりと活動が活発であったと聞いております。今は制約が多く不自由な日常ではありますが、花を通して患者さまやスタッフの皆様が一息ついて和むことができると願っております。これから、よろしくお願いたします。



病棟内散歩



チョッパーとご家族と一緒に



ご家族、スタッフに囲まれて



春



新芽が萌えだして、新年度の始まりです



2022年11月 ペンネーム 和歌さん作（アニメキャラクターの模写）

編集後記



今年も COVID-19 感染拡大の中、当緩和ケア病棟も面会制限の他、病棟閉鎖という事態を乗り越え、感染に注意しながら病棟を再開しております。

原稿や作品をご提供いただきました皆様には心より御礼を申し上げます。

いつも以上に気合いを感じる季節ごとの飾りつけで病室と病棟内を癒し空間にしてくださっているボランティアスタッフの方々にも心より御礼を申し上げます。

皆さまとの出会いを大切に、スタッフ一同力を合わせていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

令和4年度 編集担当一同



七っ森

Nanatsu-mori

第25号

令和5年2月発行

東北大学病院 緩和ケア病棟
〒980-8574

仙台市青葉区星陵町 1-1

TEL : 022-717-7986

FAX : 022-717-7989

<http://www.pcc.med.tohoku.ac.jp>

印刷：株式会社 センキョウ